

## 8 / 11 『敵意を滅ぼす平和』（エペソ 2 : 14 ~ 17）

長谷川望牧師

\*エペソの信徒たちは、かつてはまことの神を知らず、偶像の神を拝んでいたが、イエス・キリストを知って救われ、神の民ユダヤ人と近くなった。それはイエス・キリストが流された血による。「**実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。**」（エペソ 2 : 14 ~ 15）すべての異邦人が同じように神の祝福を受けることができるようになったのである。ユダヤ人は異邦人を神殿において「壁」を作って異邦人の庭より奥には決して入ることができなかつた。しかし、キリストを救い主と信じる者はだれでも救われ、神の前に平等である。また、奴隷と自由人、男と女の壁も取り払われた。壁が取り除かれ、対立する二つの者が一つになることができるようになった。これが平和の意味である。

\*「わが父、孫良源」（孫東姫著、2001年いのちのことば社）を改めて読んで感動と心の痛みを覚えた。孫牧師は釜山のハンセン病施設で献身的な奉仕をされた。その時、当時植民地支配をしていた日本の官憲から神社参拝を強いられたが、十戒の第一、第二戒を犯すことはできない、と頑強に固辞したため投獄される。5年間の虐待と拷問の苦しい生活の後、やっと解放の時が来る（1945年8月15日）。しかし、その喜びも束の間、勢力を伸ばした共産主義勢力に二人の息子を虐殺されてしまう。葬式の時に、犯人を赦すだけでなく、養子として迎え入れる決心をし、大反対の中で実行する。それは、「あなたの敵を愛しなさい」の具体的、究極的な行為である。娘の東姫は長い間赦すことができなかつたと告白している。

「**二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。**」（エペソ 2 : 16）イエスの罪の贖いを心から信じて、日々み言葉に生きていたからできたことであろう。それから2年後、今度は、良源師も人民共産軍によって投獄され、銃殺されて殉教する。彼は獄中でも、死の直前まで、イエス・キリストの福音を宣べ伝えていたことが証言されている。

「**また、キリストは来て、遠くにいたあなたがたに平和を、また近くにいた人々にも平和を、福音として伝えられました。**」（2 : 17）キリストが平和をもたらす。キリストの十字架の前にはすべての人が隔ての壁を持つことができない。

それほど愛を示してくださったのだから、私たちも敵意をキリストの中に溶け込ませ、吸収する者になりたい。それが平和の源である。